

# 超感覚的世界の認識とそれを可能にする 道徳性について

—ルドルフ・シュタイナー「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」より—

實 松 宣 夫

Übersinnliche Welterkenntnis und Moralität bei Rudolf Steiner

Nobuo SANEMATSU

(Received September 10, 1992)

## はじめに

小論はR・シュタイナーの超感覚的認識を理解しようとする試みの一つである。筆者は、シュタイナーの語る超感覚的世界と私達の周囲で語られているオカルト世界の認識との差違が長い間明瞭にならなかった。彼の語る事柄にも一種の怪しげな雰囲気を感じていたのである。しかし幾つかの決定的な相違があることが次第に明らかとなった。その一つは小論の主題であるところの、「超感覚的世界認識には、認識者の道徳性の向上が不可欠である」というものである。シュタイナーは確かに、優れた素質にめぐまれている人は、以下に見ることになる諸々の修業方法（その核心に道徳性の向上が内包されている）によるのではない別の道があることを否定しない。しかしこの別の道は例外的であり、秘儀的となりやすいのである。またこの別の道は誤りに転落する可能性も大なのである。それに対して、シュタイナーが語ろうとする方法は誰人にも可能な方法であり、それでありながら成果も確実な方法なのである。そして、この道を歩む限りでは危険はない。シュタイナーは超感覚的世界を認識する「この後者の道」を公開しようとする。むしろこの道は公開されるべきであると主張するのである。

シュタイナーによれば、認識主体の自己変革（人間性の向上）と無縁なところで、特殊な一部の能力を発展させることにより可能になるとされる超能力、また当人にさえその能力がどうして自分に具わったかを意識化できないような超能力（私達が理解しているオカルト認識の多くはこれである）は、真実の超感覚的認識ではない。真実の「オカルト世界」（隠れた世界）の認識は、認識者における思考と感情の諸力を最高度に、しかも意識的に使用することによって、そしてその使用の際に成熟する能力によって、開示されるものなのである。超感覚的世界を認識するこの能力を獲得しようとする者は、だからまず第一に、自分自身を正視することができなければならない。そしてそのことは必然的に、自分自身の道徳的な人格形成を自覚化することになっていくのである。

筆者は超感覚的世界の認識についてシュタイナーの語る諸事象の中から、「道徳性の自己形成の過程」という側面に関心を持った。例えば次の文章である。「真の神秘学の黄金律は次下の言葉で表現される。『神秘学の真理に向って汝の認識を一步進めようとするなら、同時に善に向けて汝の性格を三歩進めねばならない』」（②S. 75）。

しかしながらシュタイナーの語る道徳性は確かに、私達が学校教育での道徳性指導として目差し

ている内容そのままではない。また時代や社会の要請する道德内容を身につけ、日常生活を過ごすのに必要とされる能力が形成されるならば、それで超感覚的世界の認識ができると言うのでもない。シュタイナーの重要視する「道德性」は特定のものである。その詳細は以下に見ていくこととなるが、彼の「道德性」は人間をその真実の姿において実現するものであり、それを欠いては人間の使命は自覚できないものなのである。

## 一 超感覚的世界を認識するための条件

「どんな人間の中にも、感覚的世界を超えて、より高次の諸世界にまで認識を拡げることのできる能力が微睡している」(②S. 21)。

シュタイナーの言葉は象徴としての性格が色濃く、観点の取り方次第でいろいろな解釈が可能である。これは神秘学の基本的性格によるものなのであるが、言葉の解釈は解釈者の成熟と相関しているのである。例えば上の文章にある「認識」の語に注意してみよう。「認識」の語は「昼」の意識に対応していると言えよう。「認識」によって捉えられるものの内容、性状、特性などは、さながら昼の光の中で明瞭になっている状態であると解釈できるのである。すなわち上の文章は、超感覚(とりわけ視覚)によって物的世界を捉える時の意識の確かさと同一の確かさでもって、超感覚的世界を捉えることは誰人にも可能であるということを中心として主張していると解釈できる。超感覚的世界を認識する能力は「微睡している」だけであり、だから眼を覚ますだけでよいのである。従って問題は極めて容易である様に思える。——しかし問題の「認識」が一人の人間の生存中に可能であることは保証されてはいないのである。「微睡」からの覚醒には、数多い輪廻転生の時間が必要であるのかも知れないのである。——しかしそれはともかく、超感覚的世界を認識する可能性は誰人にもある。ではどうすればこの可能性は現実性となるのか。そのためには何から始めたらよいのであろうか。

### (1) 指導者との出会い

シュタイナーによれば、まず良き指導者(導師)に会うことである。自分一人で道を見つけることを欲する人は危険である。自分一人で超感覚的世界を直接体験したいと欲する人は誤りに陥りやすい。こうした人は自分の主観世界と超感覚的世界とを混同しやすいのである。ではどうすれば導師は見つかるのか。出会いは予定事項の実現ではないはずである。——シュタイナーの解答は、期待を抱いて努力を続けること、待つことである。真剣に努力を続けるならば、導師の方であなたを見つけ出してくれるのであると言う。続けて次の様に述べる。ところで幸いにして導師に会えたとしても、導師が一方的にあなたの求めている認識の方法を語り伝えてくれることはまずない。超感覚的認識を得ようとする学習者はどうすればよいのか。——自分自身の心性を変革するのである。この心性の変革のみが導師を語らせることができると言う。すなわち学習者は自己変革することで始めて学べるのである。それまでの自分に固執し、この自分を判断基準としている限り、導師に出会うことも、導師から学ぶこともできない。これは小論の全体を暗示する論理であると言ってよい。ここで附言すれば、シュタイナーは導師の伝えるものが「言葉」に限定されるかどうか言及していない。「言葉」は重要視されているが言葉以外のものも暗示されているようである。しかしいづれにせよ学習者には最初から一定の基本的な心性が要求されているのであり、これが欠ければ導師に出会っても導師と分らず、また導師の語る言葉も意味不明のままなのである。学習者はだから、修業者となることを自から引き受けなければならない。

## (2) 真理と認識への畏敬

学習者（修業者）に要求される基本的な心性とは何か。シュタイナーが挙げたものはその時々によって異なるものもあるが大筋では一貫しており、「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」では、冒頭に「真理と認識への畏敬」を挙げている。これは「礼讃の小道」であるとも言う（S. 25）。礼讃されるものは真理であり、真理を認識しようとする志向性である。人間の心性は多様なものを内包しているが、その内容の中から「真理と認識」を「畏敬」し「礼讃」する心が選出されるのである。この心の周囲には、「尊敬」、「恭順」（S. 26）、「献身」（S. 27）の言葉で示されるものがある。——この様な言葉で指示される心性を人生の導き手として生きることは、現代の社会生活ではかなり困難なことである。従ってそれは「小道」なのである。注意してその踏み跡を辿って行かないと、すぐに見失ってしまう小道なのである。

「真理と認識への畏敬」というこの「小道」に対立し、極めて容易にそれを歩むことのできる大道は、「軽蔑」「裁き」「批判」の道である（S. 29）。私達はほとんど無意識のうちにこの大道を歩んでいる。「しかしどんな批判も、どんな裁きも心性の中の高次の認識力を失わせる。それに反してどんな献身や畏敬もこの力を育てる」（S. 27）。

シュタイナーは「尊敬」「畏敬」「献身」の内容については語らない。何が尊敬されるものであり、畏敬と呼ぶに値するものは何であり、如何なるものが献身に値するのかは語らない。尊敬できないもの、畏敬や献身に値しないものについても語らない。尊敬するものと尊敬できないものを判別する基準についても語らない。そのため一見する限りでは、極北を尊敬する人と極南を尊敬する人との間で生じるであろう混乱や対立が処理できないのではないかという危惧が生じる。シュタイナーは私達の内面に満ちている或る心性を強調していることは分るけれども、その心性の内実は不明である…と言いたくなる。——しかしこの様な問いや危惧こそは、シュタイナーに言わせるならば、単なる思弁的な知性の産物に他ならない。後に見るように体験から離脱し、一人歩きをしている知性の産物なのである。そしてこの知性に附随してあるのが、例えば「裁き」であり「批判」なのである。だからここでシュタイナーに反論を展開をしたい人も、目下の所は「裁き」や「批判」が超感覚的認識への力を失わせるとの指摘を読んだ直後であるから、彼の論旨に従って理解することに努めてほしい。これは筆者の立場でもある。

シュタイナーによれば、「真理と認識への畏敬」「礼讃の小道」とは例えば、次の様な姿で幼少年期の心中に出現する。——幼ない時に「尊敬する人を畏敬（聖なる恥らい）の眼で見上げる」子ども、「尊敬する人に対する批判や反論が心の奥に生じようとするのを禁止しようとする」子どもの体験である。そうした子どもも後にはその時の体験を記憶から失うかも知れない。しかしこの体験をした子どもは成長して若者になった時、「尊敬するもの（例えば真理）に出会うと、心は喜びに包まれるのである」。

真理に出会った時のこの喜びの感情は、「小道」を歩み始める時の出発点の一つとなるものなのであるが、その感情の萌芽は既に幼少年期に出現するのである。大人に対する幼ない時の子どもらしい尊敬（畏敬）の心が、後には真理と認識への畏敬にまで発展していくのである。その際に大切であるのは、一見の限りではまぎらわしいけれども、幼児や少年が特定の「人間」を崇拜することではない。その人間を通して感取される「尊敬（畏敬）」の体験をすることに意味がある。「人間」とその人間に対する「尊敬（畏敬）」の体験は分離されるのである。幼少年期にはこうした分離は困難であるかも知れない。しかし大切であるのは、どこまでも「真理と認識への畏敬」なのである。尊敬される人に体現されていると感知される理念的なものなのである。

言葉を変えて言えば、幼少年期に「我々よりも高次のものがあるという深い感情」<sup>(S.26)</sup>を体験することが大切なのである。この感情を引き起こすものは人間でなければならないという必然性はないかも知れない。自然観察や数・図形の観察の際の、或る種の美的な感動体験を指摘することもできるだろう。しかしその様な指摘によって「深い感情」を体験する機会を一般化することには、それなりの危険性も増大する。理由は「高次のもの」に求められている人格的なものが希薄化する可能性が強くなるためである。

さて、視点を少し転じたい。シュタイナーによれば修業者は「真理と認識への畏敬」「礼讃」を、彼の内面において単に理解しているだけでは不充分である。それらは生きた感情として保持されていなければならない。その時に始めて、「小道」を歩み続けることは可能となる。「畏敬」や「礼讃」の方向へ向う思念が一時的に頭の中を走り抜けるというだけでは不十分なのである。「小道」を歩むとは、「畏敬」「礼讃」の感情を内部に生み出すと同時に、その感情をよく保持し続けるのであらねばならない。悟性による知的洞察で終了するのではなく、修業者の性格、態度、姿勢という全体的な変更が要求されているのである。シュタイナーは端的に述べている。真理と認識に導く感情で心性を満たすことは「勉学によっては達成されない。この達成は生活を通してのみ可能となる」と<sup>(S.28)</sup>。——言うまでもなくこれによって勉学を全て否定したと解釈してはならない。勉学に対比されている「生活」の重視をこそ観るべきである。勉学はともすると「生活」から切断された所で成立する。しかし超感覚的世界を認識しようとする者にとって、目差す認識は「生活」から切断された勉学の対象事項に留めることのできるものではない。「生活」のどの場面を切っても、「真理と認識」への感情が生きているように自己教育することが求められる。これは正しく修業なのである。

シュタイナーは例を挙げて説明する。「真理と認識への畏敬」の「小道」を歩む人は、生活のあらゆる場面において畏敬（尊敬、賛美、崇敬）できるものを見出すことができるのであるから、例えば誰かと出会う時、その人の弱点や欠点を見つけ非難したり攻撃したりはしない。むしろ相手の中の優れた部分に注意を向け、批判的判断を差し控える。愛をもってその人の長所に心を向けるのであると。これに関連する事例は数多いのであるがその一つを紹介しよう。——聖人伝の伝えるキリストの言動である。キリストが人々と共に犬の死体に遭遇した時のことである。腐乱した死体を観た瞬間、人々は嫌悪の情を抱いて顔をそむけた。ところが一人、キリストだけは感動して死体の犬の歯の美しさについて語ったのである。「きれいな歯！」と<sup>(S.334)</sup>。キリストは生活の全ての場面で、畏敬できるもの、相手の中の優れたものを見出すことができたため、腐乱した犬の死体から「きれいな歯」を見出したのである。

この様な話を聴くと押さえ難い感情を抱く人々がいる。「そこまでは無理だ!」。この人々はその後批判や裁き、軽蔑を展開する。修業者の妨げとなるこれらの感情は確かに生じやすいのである。生じやすいこれらの感情が生じてしまったり、生じようとしたらどうするのか。シュタイナーによれば、その様な時には、そういう感情を抱く自分自身を見つめるとよい。「それ（批判や裁き）に注目する瞬間」<sup>(S.29)</sup>を持つとよい。するとこの注目の瞬間に、その人は正反対の歩みを開始することが可能となり、正道の「小道」に帰することができるのである。この様に「畏敬と礼讃」に生きる可能性は常に開かれている。

それでは、「真理と認識への畏敬」を基本的な心性として「礼讃の小道」を歩み続けるとどうなるのか。——それまで微睡していた諸力が目覚めてくるのである。それは心中に太陽が昇って来るが如くであって、光と暖かさに包まれた幸福な感情の体験であるとされる。この感情は認識活動にも



よい影響を及ぼし、ともすれば冷く硬化しがちである知性に体温を通わせるものとなる。暖められた知性は「きれいな歯」の発見に近づいていくのである。

この様に心性は感情から栄養を受け取って活性化する。また感情と認識とは密接な関係にある。だからいかなる感情が心性を満たしているのかという基本的な心性の問題は重要である。「心性の養分としての尊敬、敬意、畏敬などの感情は心性を健全で力強いものにし、特に認識活動に活力を提供する。認める価値があるものを過少評価したり、軽蔑したり、反感をそれを感じたりすることは、反対に認識活動を麻痺させ、不活発にする」(S. 30)。

### (3) 内的生活の充実(開発)

超感覚的認識を得ようとする修業者に要求される今一つのことは、「内的生活」を充実させることである。これは「真理と認識への畏敬」の「小道」と全く異なるものではない。しかしその特徴を強調するためには章を新しくするのがよいと考えられるものである。シュタイナーは修業者が、次々と変化する外的印象に引きずられる感情生活から、独立した心的生を確立することの必要性を強調して、「内的生活」の充実(開発)を語るのである。

外界からの印象に駆り立てられている人の心性には中心軸が確立されていない。そのため常に「気晴らし」を外に求めるということになる。その様なことでは超感覚的認識を得ることは無理である。それでは外界に対して鈍感になれば良いであろうか。否である。外界からの印象は、「内的生活」を確立しても、それ以前と同様に流入する。ただ内部に中心軸が成立しているために、それまでの様に流入してくるものによって惑わされることがない。惑わされることがないために、流入するものをむしろ逆に新鮮に感じて楽しむことができる。「内的生活」を開発した人は、外界からの印象に対して鈍感になるのではない。敏感になるのである。しかし敏感になることと外界の印象に振り廻されることは異なる。両者の区別がつかないのは内部に主導性を発揮するものが体験できていないためである。「外から印象を受け取る際に、常に豊かな内的生活が主導権を持ち続けるべきである」(S. 31)。これが大切なのである。

豊かな内的生活には豊かな感情が生きている。そうした人は山岳地方を旅する時も、大洋を航海する時も、感情の貧困な人とは別の体験内容を持つはずである。——しかし如何にすれば豊かな内的生活を得ることができるのか。シュタイナーの解答は「孤独に自己沈潜する時間を生活の中に確保する」(S. 31)ことである。(これは後に指摘する「集中」「瞑想」に連なるものである。)

「孤独な時間」の持ち方である。シュタイナーは周囲にそれを宣伝して自分のための時間を持つような方法には賛成しない。日常の稼業はそれまでと同様に義務を尽くすのである。周囲の人が修業者の変化に気付く必要はない。むしろ世間の知らないうちに、静かに試みるのである。従って、一日中、修業を名目として「孤独」に過すことも望ましくない。シュタイナーは、超感覚的認識を得るための修業に、生活の全てを注ぐことを禁止する。理由は感情の健全な均衡が失われやすいからである。

「孤独な時間」が生活の中に確保できるようになったらどうするのか。この時間に一定の表象に集中する(自己沈潜する)ことを試みる。始めは自分の体験内容を取り上げて集中するよりも、例えば次の様な「思考訓練」をするのがよい。

毎日、一定時間(五分間でよい)、一定期間(例えば一ヶ月)日常生活上の対象であるピンや鉛筆の一つを選んで、思考をそれに集中するのである。そしてそれをしている間、対象と関係のない全ての思考を排除する。頭の中にあるのは対象とそれに関係することのみであるようにする。——

実行してみると易しいようで難しい。ピンを凝視しようとしても周囲のものが同時に見えてしまいピンの中に集中できない。ピンに無関係のものを消去しようとして眼を閉じると、ピンとは無縁の諸表象が押し寄せてくる。シュタイナーはそうした時、次の様に自問することを勧める。——このピンはどんな材料からできているのか。それらの材料はどの様にしてピンとなったか。ピンの必要性とは何であるのか。ピンは何時発明されたのか、などである。そのような思考に助けられて対象であるピンの表象に集中する度合を次第に強化するのである。——この様にして自分自身に集中し「沈潜」する時間を毎日持続すると、確実に「内的生活」が強化され、豊かになると言う<sup>(①, S. 330)</sup>。疑念を抱く人は実行してみてほしいと。

「孤独に自己沈潜する時間」において禁止されている一項目がある。「禁止」という語は外からの強制という観念を伴うので、よりシュタイナー的に言うならば、自らが主体的に選び取る「慎しみ」が良いのかも知れない。修業者に求められているこの自分から慎しむこととは、「我欲の追求」である。

上にピンを事例とする集中から始めるのが望ましいと述べた。一見する限りでは意外と思えるのであるが、修業の最初は人間の心性を避けるのが望ましいのである。最初から自分の体験内容（例えば外界から受けた喜びの体験——観賞した映画など）に集中すると、集中が楽しかった喜びを想起して再びそれに浸るということになりやすい。楽しみの余韻を味わうという方向に流れるのである。しかしこれこそ「我欲の追求」に他ならない。わざわざ孤独となれる時間を捻出してまで集中することを修業するのは、過去の体験内容を再現して再び楽しむためではない。むしろその楽しみを消去して、体験内容から明らかになる事柄を観察するためなのである。体験がその様な内容とならざるを得なかった必然性を洞察するためなのである。

「我欲の追求」をシュタイナーが否定するのは、これが修業者の得ようとする認識に閉鎖性をもたらすためである。「我欲の追求」が混入すると、修業者は「真理と認識への畏敬」の「小道」を自分のために歩むこととなる。その様な歩み方は誤りに陥りやすい。修業者はむしろ「真理と認識」のために「小道」を歩むことができなければならない。その歩みの方が逆に真実の自分を生かすのである。だから修業者は「我欲の追求」に代表されるそれまでの自分自身を変革することができねばならない。——これは自分の楽しみに鈍感になったり、自分を犠牲にすることを勧めるものではない。楽しみを求めることはあってよい。必要でさえある。ただ、それに留まりそれに拘束され支配される時には、拒否されるべき否定性への傾向が生じる。人間の最も深く豊かな楽しみとは、自己閉鎖的な「我欲の追求」ではなく、世界に開かれているものであり、「真理と認識」の道に連なるものなのである。

シュタイナーは次の様に語る。「その様な彼（我欲の追求者）は、自分にとっては何物かであり得ても、世間にとっては無に等しい。彼はその限り、どれ程内部で活動的な生を営み、『自我』を大きく育成していったとしても…世界にとっての彼は死んでいるに等しい。神秘学徒は楽しみをもっぱら、世界のために自己を高貴な存在にしようとする彼の意図の手段とみなすべきである。楽しみは彼にとって、世界についての報告をもたらす斥候である」<sup>(②, S. 32-33)</sup>。

これまでことから「孤独の時間への内的沈潜」は修業者の実生活からの隔離、あるいは生きた生活の活動性からの分離ではないことが明らかとなる。むしろこの時間は、修業者が世界に対する正しい生き方を発見するための「内的生活」の充実と強化の時間であることを理解することができる。孤独の時間において、修業者は「楽しみ」が「世界のための」「手段」であり、「楽しみは…世界についての報告をもたらす斥候である」という体験をするのである。

これと関連する内容が「神智学」にあるので引用してみたい。——「快と不快、喜びと苦しみは、修業者には、それを通して彼が事物について学ぶところの機会でなければならない」(③, S. 181)。喜びや苦しみの感情から超越することができた人にとって、そうした感情は今や事物の本性を打ち明けてくれる優れた教師になると言うのである。だから修業者は「楽しい」「苦しい」と言うだけでなく、その楽しさや苦しさが、自分に語りかけてくるものを常に考え続けることができねばならない。——特定の印象を受け取ると、その印象に喜ぶ、あるいは不快な気持ちになるというのは修業する以前に一般的な感情状態であった。しかし「内的生活」が強化され、充実してきた修業者には、今や、その様な快—不快の感情は、事物の本質を認識するための道具に変化するのである。「快と苦は、彼の中の単なる感情から、外界を知覚する感覚器官にまで変化する」(③, S. 181)。感情こそは修業者が事象をどのように観ているかを示すものなのである。これは五官の一つである視覚によって、外界の対象知覚は完成するという立場ではない。そうではなくて、生きた感情と不可分である全体としての主体が知覚を成立させるとする立場である。この立場では人は自分の感情を鏡として使用することで、鏡に映る世界の真の姿を知ることができるとするのである。

「神智学」のこの視点を通して考えてみると、問題の処在がより明確になってくる。修業者は喜びや苦しみという体験感情の下に留まり、それに心を奪われているだけの存在から、その感情を理解し、この感情を一種の感覚器官(道具)とすることで、事象の本質を体験することができる存在にまで高まることができる。(喜びや苦しみ、快や不快の中に生きているだけであった存在から、喜びや苦しみ、快や不快を通して認識する存在にまで高まるのである。)この時、感情は事象の本質に対する知覚器官となっており、「世界のための報告をもたらす斥候」となっている。

快や苦の感情自体を自己目的とせず、それを手段に変えて生きることのできる人は、人生を自分のために生きるのではなく、「真理と認識」のため、世界のために生きることができることに近づく。修業者は次の言葉を胸に秘めていなければならない。「あなたの求めるどんな認識内容も、あなたの知的財を蓄積するためのものなら、それはあなたを進むべき道からそらせる。しかしあなたの求める認識内容が人格を高貴にし世界を進化させるためのものであるなら、それは成熟への途上にあるあなたを一步前進させる。」(②, S. 33)。

上の文意は次の様に表現しても同一であるとシュタイナーは考えている。「如何なる理念も理想たりえぬ限りは心性の力を殺す。しかし如何なる理念も理想たりうる限りは、すべてあなたの中に生命力を生み出す。」

以上のことから明らかになることは、超感覚的認識を得ることと、自己の人格を高貴にすることと、更には理念を理想として生きることとは、さながら円一の円において顕現する部分の相違を指摘するのであるにすぎないということである。

## 二 内的平静

これまでに「真理と尊敬への畏敬」「礼讃の小道」と「内的生活の開発」を中心として修業者の生き方を観てきた。以下はその修業者が遵守すべき「実践上の諸規則」(②, S. 35)である。シュタイナーはこの諸規則が太古の時代の霊指導者の経験や知識と一致するものであると理解している。

「修業者は諸規則を遵守するべきである」。——この様に言うと、導師の支配を甘受するのかという不安が生じるかも知れない。しかしそれは杞憂である。超感覚的世界への認識を得ようとする道は、人間の独立性を尊重し守護するものであるからだ。——この独立性の尊重と守護は、修業者

も当然のことながら厳守しなければならない。修業者にも「自分の行為や発言がどんな人の自由な決意にも干渉しないように配慮する」態度<sup>(S. 36)</sup>が求められるのである。

私達が先に見たところの「我欲の追求」を自主的に慎むことのできる人は、他人の自由な決定の尊重に異議を唱えることはないはずである。

### (1) 自分自身を他人とする

シュタイナーが指摘した「実践上の諸規則」の第一は、次の言葉で示される。「内的平静の瞬間を確保し、その時間の中で本質的なものと非本質的なものとを区別することを学ぶ」<sup>(S. 36)</sup>。——「内的平静」とは「孤独な自己沈潜の時間」に強化された「内的生活」から結果する状態である。だから「内的平静」とは、特別の怒りも特別の喜びもないという諸感情の一時的な平静状態のことではない。「内的平静」の瞬間とは、凝縮されて高密度となっている自己統禦の状態であり、思考と感情は最高の活性化状態になっているのである。いわゆる「瞑想」による到達の境地である。だから「内的平静」においては、先に見た様に、自分の感情を道具として使用することで、事象の本質を知覚することができるのである。

シュタイナーは上の規則を重要視して、これは修業であり、「真剣」かつ「厳格」に学ばねばならないと強調する。そしてこの規則を遵守できるようになるための方法として、私達が既に知っている練習法を繰り返す。「(修業者)は毎日、僅かの時間でもよいから、日々の仕事とは全く異なる事柄のために過ごす時間を確保しなければならない。この時間の過し方もまた、日常の他の場合とは全く異なっていなければならない。……正しい仕方でのこの特別の時間を過ごす人は、やがてこの時間の中から、日々の課題のための充実した力が受け取れることに気付くだろう。……この規則のために過ごすべき時間が本当にもてないと言うのなら、毎日五分間だけで十分である。むしろどの様にこの五分間を使用するかが大事である」<sup>(S. 37)</sup>。

内的平静の時間(状態)における集中のあり方の要点を新しい角度から照明するならば、それは自分が体験した一切を、より客観的な観点から見るができることである。先に見たピンへの集中はその後は次第に「喜び」、「悲しみ」、「心配ごと」等、集中する対象は種々の心的体験に移っていく。しかしそうであっても基本は同一である。ピンへの集中の時と同様に「自分の経験や行動を、自分のものでなく、他人の経験や行動であるかのように」<sup>(S. 38)</sup>観察し、かつ感じるができるようになることを目差す。「自分自身を他人であるかのように見做しうる能力を身に付けねばならない。批評家の冷静さをもって、自分自身を観察しなければならない」<sup>(S. 38)</sup>。

このことが可能となると、自分の体験内容が今までとは別の現れ方をしてくる。そしてそのことにより本質的なものと非本質的なものとを区別することもできるようになるのである。シュタイナーはそれを、例えば次の様な体験と言う。「一日中町の中において、大小さまざまな事柄を間近く見た後で、夜、近所の丘に昇ってその町を一望の下に見渡すようなものである。その時には町の中の対象相互の関係は、その中にある時とは違う様子で見えてくる」<sup>(S. 39)</sup>と。

今の自分の体験内容を、すぐにそれが他人のものであるかのように客観視することができない人は、昔の体験内容について試みればよい。大切であるのはその時に何が観察されるかではない。そうした観察が可能となるに伴い、内的平静さの内において結晶化を始める力の方なのである。この力は、日常的な人間に対する「より高次の人間」を産出する力となるからである。

従って、内的平静さにおいて結晶化を始めるこの力は、修業者において実感できるものとならねばならない。頭の一部でそれらしきものが想定できるというだけでは不十分である。だから修業は

「真剣」かつ「厳粛」であることが要求される。(要求されるというよりは、修業者は自分から求めて自然にそうなるのである。)

「より高次の人間」が産み出されるとどうなるのか。——その人にはおちつきが具わる。行動に確かさが具わり、取り乱しがなくなる。自己統禦が進んで外的事情の支配を受けない。怒りや不安、臆病から解放される。「もっと能力があれば」と嘆くことなく、「できるだけのことをしよう、力を結集しよう」という姿勢になる。

日常生活にこの様な安らぎや落ち着きが生じると、それが今度は内部に働きかけて「より高次の人間」を強化する様に作用する。

こうして、修業者は内部に充実したものが成長していくのを実感することができる。その結果として「外界からの印象が彼に与える影響の範囲を、次第に自分で規定できるようになる。」<sup>(S. 41)</sup>。するとどうなるのか。——他人から受けた中傷の言葉が以前の様には自分を傷つけることがなく、怒ることが少なくなる。待たされるとイライラしていた人も、待たされることで心がかき乱されなくなる。今の間に何かできる観察をしようという気持になる。これは、目覚めた「より高次の人間」がその人の支配者となってきたためである。——これの逆は、日常生活で私達に周知の人間である。この人間は喜んだり怒ったりすることを支配できない。これは、いわば人がその人自身の外のものに支配されている状態である。外的人間が支配者で内的人間は奴隷状態となっているのである。

超感覚的認識を得ようとする修業者は、自分の内部に「より高次の人間」の支配を確立する必要がある。「自分の内部の力を開発して、外界の印象を、自分の定めた仕方で自分に作用させる」<sup>(S. 42)</sup> ことを目差すのである。——注意しなければならないことが一つある。それは「より高次の人間」が静止状態のものではないことだ。この人間は絶えず進化していく。また進化していかねばならない。そして、この進化を押し進めるものは、修業者の「内的平静」における集中の力なのである。(「より高次の人間」は修業者の内側からしか目覚めさせることはできない。)

## (2) 思考への集中 (瞑想)

自分を異邦人として見ることでできるようになった修業者には、「より高次の人間」が誕生することを上に見た。この新しい「より高次の人間」の誕生は、それはそれで大切なのであるが、この人間の誕生直後の有り様と言え、それはまだ自分自身のことしか、自分自身のことからしか考察することができない状態である。自分の個人的な生活状況と関係している私的な体験や行動しか考察できない。そのために、さらに進化することを必要とする感情が内部に生じることとなるのである。

この進化を必要とする感情は次の事を承認する。「自分の個人的な状況に依存しない純人間的な領域にまで自己を高めなければならない」<sup>(S. 43)</sup>。これは個人的関係の枠組を越え出るものの甦りである。この新しく甦るものは正しく、日常生活を規律し拘束している世界よりも「より高次の世界」にある。——私達が既に見てきた「より高次の人間」(日常的人間の内的支配者)は、実はこの「より高次の世界」の住民であると言ってよい。——修業者は高次の諸世界があることを認識し、その諸世界の一部が理解できるにつれて、理解している自分の一部もその世界に所属していることを体験していく。修業者は自分自身も高次世界の一員になれることに気付き、自分の存在の中心を日常世界から「より高次の世界」に移すことが自然であると感じるに至るのである。(そして終には、「より高次の世界」の一員として生きるまでに至るのである。)

その様な生き方ができるようになるとどうなるか。シュタイナーによれば、その様な生き方のできる人は「内的平静」の瞬間に、自分の内部の声に耳を傾けることで、霊界との交信が可能となると言う。「日常の騒音は静まり、彼の周囲を沈黙が支配するようになる。外からの騒々しい印象を想起させるような想念は一切排除される。内部における静観、純粹霊界との対話が彼の心の全てに滲みわたる」(S. 44)。

この「静観」に到達することが「内的平静」の課題である。しかし、修業者がまだこの「静観」を作り出し得ない時にはどうすればよいのか。——修業者はこの様な「静観」をすることが自分の「自然的欲求」となるよう努力するのである。この欲求は自発的で自然な欲求でなければならない。しかしどうすればその様な自然な欲求を感じることができるのか。

シュタイナーは「思考」に集中することを勧める。一つの思考世界に没頭するという修業をするのである。——これまでに列挙した修業方法をここで想起してみよう。私達はピンへの集中を先に見た。そこで強化されたものは単なる観察能力の向上ではなかった。それは同時に思考に集中する修業ともなっているのである。同じことは自分の体験を他人として見る修業方法についても言える。自分を他人として見るためには思考への集中を欠いては不可能である。また、「孤独な自己沈潜の時間」「内的平静」の瞬間における修業者の心中の営みは全て、思考の活動という側面から捉えることができる。さらには、集中することで、諸々の体験内容（その内容は感情的要素によって色濃く染め上げられていることが多い）の中に、本質的なものと非本質的なものを区別し、「より高次の人間」を発見することができるのも思考によって可能となる。全ては思考の働きに他ならないと言えるのである。

これまでに見た「内的平静」に関する修業を、「思考」の修業という側面から照明することを試みてみよう。超感覚的世界の認識を得ることにに関して、一貫して「思考」を重視しているのは、シュタイナーの「神智学」である。

「神智学」における「思考」の取り上げ方を見てみよう。——ここでは超感覚的認識を得るための第一歩は「思考像」を把握することであると言う。「なぜなら、人間は思考存在なのであって、思考から出発する時にのみ、自分の歩む認識の小道を自分で見つけ出すことができるからである」(③. S. 172)。修業者は導師の語る言葉を真剣に思索し学ぶのであるが、その際、「真剣な思考作業を自分に課す」、「真剣で禁欲的な思考作業」を営むなど(③. S. 174)、思考生活の意義(精進)をシュタイナーは強調する。また修業には心性が絶対に健康でなければならないのであるが、この健康を最もよく管理してくれるのも真の思考であると述べている(S. 175)。

さらに次の様な言及もある。「私のいうことを信じなくてもよいが、それについて考え、それを君自身の思考内容にしてみたまえ」(S. 176)。——これは自信に充ちた言葉である。しかし同時に祈りの時の訴えの言葉を聴く様でもある。シュタイナーは導師の言葉に対して、偏見を排して没頭できることの大切さを指摘していた。しかし「神智学」の学習は信ずることを要請するものでなく、思考を要請するのである。偏見を捨てて真剣に、伝えられるものに集中し、その内に入り、それを自分の思考内容にして欲しいと言うのである。徹底した思考の重視である。

シュタイナーが述べる既存の先入観(偏見)を消去する一つの方法を紹介しよう。——その方法とは周囲の人に対して、どの様な判断も下さぬことを試みるというものである。好き—嫌い、愚か—賢いなどの判断を中断するのである。そしてさらに、私達が日常生活で何となく下しているこの様な判断の基準を意識化する(思考する)ことで消去できるよう試みるのである。——私達はその方法は既に知っていると言ってよい。小論の読者は「軽蔑」「批判」「裁き」が超感覚的能力の



向上を阻止すると述べた箇所を想起されよう。そこでは心性の基本的な在り方の問題として、「感情」により強く配慮した記述の展開をしたのであるが、ここ（神智学）では「判断」「思考」により強い配慮をしているのである。——ともかくシュタイナーは、私達が日常生活で慣れ親しんでいる判断基準を棚上げにして、その様な尺度ではなく、人間を純粹にその人間そのものから理解する方法を述べようとするのである。その最良の方法、「最上の修業は、嫌悪を感じている人間についてこのこと（判断を下さないこと）を行う場合である」（S. 178）。

私達は先に、修業者は「自分の個人的な状況に依存しない純人間的な領域にまで自己を高めなければならぬ」（S. 43）ことを知った。判断の一時的停止という問題もそれと同一であると言える。純人間的な領域にまで高まることを可能にする一つの方法が、今見ているところの判断の停止なのである。何か判断を下したくなる状況下に立たされる時、何とか我慢して、とらわれのない印象の方に思考を集中していく。これは確かに修業である。この修業と共に次の努力をするのである。「事物や出来事について語るよりも、事物や出来事の方が自分に語りかけてくるようにすべきである。…自分の中に何らかの思考内容を作り出そうという働きを抑え、もっぱら外部のものに思考内容を作り出させるのである」（③. S. 178）。

この基本態度に向けて努力することで、修業者は次第に、自分の感情に対して内的な独立を手にし、感情を統禦できるようになる。外界の移りゆく印象から自由になれる。快一苦におぼれないでそれが理解できる。快一苦の感情を道具として事象の本質を認識することができるようになる。これは「真理と認識」への「小道」を歩んでいることに他ならない。これら一連の過程を貫いているのは「思考」である。

シュタイナーによれば「より高次の世界」（超感覚的世界）の認識を得ようとする修業者は、「厳格に規則づけられた思考」を習得しなければならない。「より高次の世界」は「この思考」においてしか真の姿を現わさないからである。思考を厳格に規則づけるための修業が「内的平静」における集中（瞑想）である。シュタイナーはこの思考集中に近い体験を与えるものとして「数学」を重要視した。数学は自分の思考を厳格に規則づける上で、最適の準備を与えるのであると。

以上は「神智学」における「思考」の意義の指摘である。「内的平静」の瞬間が「思考」の集中活動と不可分であることがよく分る。しかし思考は思考のみに留まるのではなく、これまでに見てきた様に、むしろ心性の他の要素、とりわけ感情と相互に影響し合っている。「内的平静」の瞬間は、思考の在り方が問われる瞬間であると同時に、感情の在り方が問われる瞬間でもある。一つの世界（一つの事象）に没頭する時、そこでの思考と感情は一体のものとして体験される。その際の感情は思考の附加物や補助ではない。「生き生きした感情」そのものが思考の活力となっているのである。この感情を伴わない思考は貧血状態にたとえることができよう。貧血の思考では影絵の様な表象が頭の中で浮き沈みするだけである。

「生き生きした感情」と一体化している思考において、「より高次の人間」や「より高次の世界」を体験することが大切なのである。この体験ができた修業者は、この体験そのものに強い現実性を感じる。思考世界の方が感覚的現実よりも現実性が希薄であるとは感じられなくなる。むしろ思考世界の方がより偉大であり、より現実的であると感じるようになる。思考内容は影絵の様な虚構の世界なのではない。隠れた諸本質の現われ（語りかけ）であることが分ってくる。そして例えて言うならば、これまではもっぱら耳から言葉が聞こえていたが、今やそれに加えて、新しく心の内から言葉が聞こえてくるのである。修業者は「開悟」したと言ってよい。それは限りない幸せの

感情であるとシュタイナーは言う。

### 三 霊界参入の三段階

以下に見ることはこれまでの内容を整理するものであるとすることができる。新しい観点は高次の感覚器官（超感覚的世界を知覚する器官、例えば「霊眼」）が形成されることである。——（筆者にはシュタイナーの語るこの高次の感覚器官の内実が今一つ「生きた感情」をもって理解できない。そのためこの高次の感覚器官が形成されるまでの修業方法を中心として述べることにしたい。そのことによって、これまでに挙げた具体例をより豊かにし、超感覚的な世界認識に至る方法をより多面的に考察することにする。）

既に私達は「霊界参入」の道程を歩み出しているのである。それと言うのも超感覚的世界の認識を獲得しようとする修業は、それが修業についての思考にすぎないとしても、それは既にそのまま「霊界参入」に連なるものだからである。

シュタイナーは「参入」の三段階は素描であり、上級学校の正課授業に対する予備学校での臨時授業の様であると言う。しかし神秘学の全ての修業がそうなのであるが、修業はそのまま最終段階での到達事項を内包しているのである。だからたとえ臨時授業の学習と言えども、「真剣」かつ「持続的」に遵守される時には、それはそのまま本来の授業（正課授業）となっているのである。——「霊界参入の三段階」とは「準備」「開悟」「参入」である。しかしこれらの「段階」を、段階という言葉から生じる固定的なものとして理解してはならない。

#### (1) 「準備」の段階

「まず始めに、我々を取り巻く世界の中の特定の事象に注意力を集中させることが必要である」(S. 51)。その事例としてシュタイナーが選んだものは、取り扱いに濃淡はあるものの三つある。「植物の二様相」、「音の世界」、「人間の言葉」である。

##### ①植物の二様相

植物の対立する二つの様相に注意力を集中するのである。その一つは発生し、生長し、繁栄する様相であり、他の一つは衰微し、凋落し、死滅する様相である。その植物を眼前において、具体的に観察する。（例えば田植えた直後の稲と、刈り入れを前にした稲である。）一つの様相に注意を集中する。その時には他の様相も含めその他一切のもの、一切のことを忘れる。そしてその一つの様相だけから受ける印象に没頭する。そうして或る感情が湧き上がり心の中を満たすのを待つ。これは生長し開花する植物が観察者の心に語りかけるものに耳を傾けることである。思考に混入し易い既存の判断（先入観）は停止させる。植物自身に語らせ、その時の感情を味わうのである。

始めはひたすらに植物を観察する。デッサンをし色彩をつけてもよい。ただその時の線や色はそれ自体が重要視されるのではなくて、「観察」に奉仕するのである。そしてその後心に生じる感情と思考に集中するのである。——これを行うと、観察される植物に対する感受性が鋭くなる。感受性が鋭くなることは大切である。しかし感受性のこの敏感さは必ずしも観察後に心に生じる感情と思考を強化することにはならない。

より大切であるのは後者である。すなわち、観察後に心に生じている感情と思考に集中を強めることである。——この時「内的平静」が保たれ、感情と思考には、共に、注意が集中されない

といけない。

生長し開花していく様相の植物について行ったと同一の観察を、次は凋落し死滅する様相の植物について行う。同一の作業を交互に行うのである。真剣にこの作業を行うのであれば、それまで知ることのなかった新しい感情と新しい思考を観察者（修業者）は体験できると言う。

——既に指摘した事ではあるが、ここで再度繰り返しておきたい。知的能力に優れている人はともすると、注意力が集中される事象や事柄の意味を穿さくすることで終ってしまう。思弁的知性の力で問題を処理し、決済してしまおうとするのである。しかしこれは、今求められている感情と思考への集中ではない。逸脱なのである。この逸脱が生じるのは生き生きした感情を伴っていないためである。感情は思考と共に重要である。

「もっぱら生き生きと、健全な感覚と鋭敏な観察力を用いて、感覚世界に観入し、そして自分の感情に自己を委ねればよい。事物が何を意味するかを思弁的な知性の力で決済しようとしてはならない。事物そのものに語らせねばならない」(S. 54)。シュタイナーはこの箇所に注を付して、芸術感覚の意義を指摘する。「自己の内部に沈潜する静観的態度と結びついた芸術感覚は、霊的能力を発達させるための最上の前提である」(S. 54)と。

開花する植物と凋落する植物について、交互に真剣な集中作業を行っていくと、新しい感情と思考が体験できると述べた。シュタイナーに従ってこの体験の概要を表現してみよう。次の様である。生長する植物からは「日の出を仰ぐ時の感情」に似た、また凋落する植物からは「月が昇る時の感情」に似た体験をすると(S. 52)。思弁的知性の過剰な力を制禦できない人の場合は、この様な感情的体験が欠落するのである。ところが、シュタイナーによれば、こうした新しい感情と思考こそ、霊性を感知する器官となるものなのである。——ここでは植物の生長する様相と凋落する様相という正反対なものが対で提出されていることが重要である。それと言うのもこの二つの様相、またそれに対応する二つの体験は、心的世界全体の一つの基本線、一つの基本形象の範例となるものだからである。

## ②音の世界

音も修業の対象となる。音に集中するのであるが、無生物の音より生物の音（声）から始めるのが良い。声には感情が現われやすいからである。「修業者は音が自分の心の外にある何かを告知しているという点に注意力の全てを集中するのである」(S. 56)。音という自分とは異質なもののの中に沈潜することが大切である。そして自分の感情を音が伝えてくれる快や苦に集中する。「彼は自分にとってその音が何であるか、自分にとってそれが好ましいか否か、気に入る音であるか否かという観点を超えなければならない。音を発する存在自体の中で営まれるものだけが彼の心を充たすまでに到らねばならない」(S. 56)。

これが音による心性の修業である。この修業はピアノが巧みに演奏できるようになることとは別のものを目差している。だからと言って演奏技術の習得を軽視してよいのではない。しかし技術の習得と同時に、否むしろそれに優先して、音のいわゆる「魂」を感知しようとする方向を重視するのである。——霊界参入（超感覚的世界の認識）は音によっても可能である。上に述べた様にして音を感知できるようになった修業者は、全自然がその響きを通して人間にささやいている秘密を聴き取ることができるとシュタイナーは言う。音は「自然の意味深い言語」となるのである。

### ③人間の言葉

音での修業は人間の語る言葉についてもそのまま当てはまる。しかし人間の言葉（話し言葉）は音に対するより以上の注意が必要である。（書き言葉の場合は更にである。）修業者は音に集中した時と同様に、話しかけられる言葉に集中しなければならない。音を聴いた時に自分の好き嫌い、快や不快を沈黙させたと同様に、話しかけられた言葉に直ちに反応するものを抑えることができればならない。「修業のためには、自分の内なるものを完全に沈黙させる習慣をつける必要がある」(S. 57)。「傾聴」が自然にできるようになることが大切である。

そのためにはどうするのか。シュタイナーは繰り返し同一の論理を展開する。例えば、一定期間を定め、自分とは正反対の思想に耳を傾けてみるのである。その際、自分の内部の一切の賛成や反対の心を完全に沈黙させなければならない。確かに、ただ沈黙しておれる様になることが大切なのではない。賛成や反対の心を沈黙させようとする時、意識の底にあって表面には現われにくい感情の微妙な動きに注意を集中することの方が、むしろが大切なのである。

この集中ができる様になると、そこから一つの力が生じてくる。この力は、例えば何らかの意味で自分より劣ると思う人の発言に耳を傾ける時、さまざまな種類の優越感や知ったかぶりを抑制する力として現われる(S. 58)。

だから「傾聴」が自然にできる人は、他人の言葉を「没我的」に、自分の意見や感情を完全に排除して、聴くことができる。そのことによって「相手の本質的な部分と融合し同化する」(S. 58)こともできる。「この様な態度で子どもに接することは、誰にとっても有益である。どんな賢者といえども子どもから無限に多くのことを学ぶことができる」(S. 58)。

この様な修業を重ねると、やがて「新しい聴覚」が生じると言う。耳には聞こえず、物質音では表現できない声（言葉）が聴き取れると。シュタイナーはそれを「内なる言葉」の知覚器官の形成と呼ぶ。「霊聴」である。

### (2) 「開悟」の段階

この段階は霊界を感知するに至った段階である。霊界を知覚する器官が形成された段階であると言うこともできる。シュタイナーはそうした新しい世界を開悟する瞬間が、或る時、劇的に生じるかの様な説明をすることがある。しかし他方では、この瞬間の成立に先立つより以前の段階において、開悟される時の内実となるものが次第に形成され、目覚める時を待つかの様な説明もする。後者の説明が修業者の励ましとなることは言うまでもない。

期待されていた修業の成果が現われないと、迷い始める人や、修業への努力を放棄する人も生じやすい。この様な人々に対してシュタイナーが語るのは、特定の時間内にどれだけ進歩するかが問題なのではないこと、真剣に求め続けることが大切であること、である。目立った進歩も現われないうまま数年間が経るということもある。しかしその様な人にもいつか必ず、全く新しい世界が現われてくるのであると。

「開悟」のこの瞬間はそれまでの生活の流れからすると明白に非連続として体験されるものなのであろう。しかし「開悟」を例えば、明白な昼の意識状態における感情と思考の高まりの体験であるとする、そこに至るまでのいわゆる夜の、暗い意識状態にある感情と思考の流れを考えざるをえない。後者の暗い感情と思考の流れ（またその作品）に注目する時には、非連続とみえた「開悟」の出現も、修業者の生命の奥底ではある種の法則的必然性の結果（因果）に他ならないのである。シュタイナーが修業の仕方や心得について与えている細かい注意の一つ一つは、この法則的必

然性への導きを示そうとするものなのである。——その意味では、「準備段階」の修業はそのまま「開悟段階」に連なる。また「開悟段階」で述べられることは「準備段階」での修業に他ならない。

「開悟（悟り）は非常に単純な修業から生じる」（S. 61）。「忍耐力を結集させて、この単純な修業を誠実にかつ持続的に遂行する人だけに、内部に顕現する光を知覚する能力が与えられる」（S. 61）。——これらのことは私達には既知のことである。これまでに見てきた修業方法は、どれを取り上げてみても、とりわけ複雑で取り組みが困難というものはなかった。奇怪なものでは更になかった。その気になって取り組みば誰でも容易に着手できる。しかしシュタイナーの期待する心境（心意状態）にまで至ることは至難である。努める他はない。準備段階での諸々の修業に努力する他はないのである。

以下の事例も、だからこれまでの事例に並べて考察することができる。

### ①水晶と動物の比較

鉱物である水晶と動物との比較に思考を集中するのである。——ここでも思考には生き生きした感情が伴い、その感情が心の全体を支配していること、また別の思考内容や感情が混入しないことの大切さは従前の通りである。——ではどのように思考するのか。

「次の言葉に思考を集中させるのである。『石には形があり、動物にも形がある。石は静かに自分の場所に留まり続ける。動物は場所を移動する。場所を移動する様に動物を促すのは衝動欲望である。動物の形もこの衝動に従って形成されている。その諸器官はこの衝動にふさわしい在り方をしている。これに対して石の形は欲望に応じてはいない。欲望を持たぬ力によって形成されている』」（S. 61）。

この言葉に思考を集中させ続けていると、修業者の心中には二つの異なる感情が生じる。シュタイナーは「真剣に」「忍耐強い」修業を続けるならば、必ずそうした感情が生じると言う。——私達はこの論理も既に知っている。——続いて次の様に語る。そうした感情が修業者に生じるのは、始めは観察している水晶や動物を眼前にしている時間の間だけで、そうした対象物が眼前から取り去られると感情は消滅してしまうであろう。しかし修業が深まると、外的対象をその都度観察しなくても、それについて考えるだけで、二つの感情が現われるようになる。そうするとここでも、感情と、感情に結びついた思考から、霊的世界への知覚器官が形成されてくるのである。

例えば「霊眼」である。これは霊界や魂界の「色」を見る器官である。「霊眼」の開く時、「開悟」の段階は到来する。

### ②霊眼で見る世界

「霊界や魂界の『色』を見る」という表現は誤解を生じやすい。超感覚的世界にも、可視的な現象世界で感覚されると同じ色があるかのように錯覚されるからである。（同じことは、これまでの「音」や「言葉」についても言える。また「霊眼」という表現もそうである。）霊界や魂界の「色」は物理学での対象となる色ではない。比喩である。何とも表現しようのない隠れた世界の事象や事物を表現するためには、可視的な感覚世界で通用している言語を使用するより他に方法がない。このことを明瞭に自覚していないと、超感覚世界が感覚世界以下の非感覚世界と同一視されることになる。私達がオカルト世界として取り上げているものの大半は、非感覚世界に他ならない。超感覚世界の事象や事物が如何なる形であれ、肉眼で見える感覚世界に顕現すると考

えるのは錯覚である。シュタイナーは「水晶玉の靈視」はエクソテリックであると明言している（S. 63）。「靈眼」で見る「色」は、肉眼で見る色が呼び起こす印象内容に近いことを指示するに留まる。それから先を説明することのできる言葉はない。それから先は、直接に「見る」体験をする、すなわち開悟する以外に方法はない。（繰り返して述べるならば、「靈眼」の見る「青色」は、肉眼が青い色を知覚する時に体験する質的内容と共通する或るものが、靈的体験として感得されるということである（S. 73）。肉眼の受け取る色の印象に類似するものが、靈的な知覚を通して感取されるということである。このことを自覚していないと靈的なものの中に物質的な体験を繰り返すという誤りに陥ることになる。）

「色」について述べたことは、「色」の形態で現われる「アウラ」についても同様である。——この様に見てくると、シュタイナーの使用する言語は全て、一種の暗号文字であると言うことができよう。読者は自身の体験を吟味し、自分の感情や思考を制禦していくことで、それも一定形式の下に制禦していくことで始めて、その暗号文字を解読する資格を与えられるのである。修業者はこの資格を得るために、自分から欲して、自主的に、自由な意志の下に自身を変革していくのである。

水晶の結晶と動物に対する比較考察に立ち返る。シュタイナーによれば、「靈眼」で見ると、水晶からは「青」ないしは「青味がかかった赤」を、動物からは「赤」ないしは「赤味がかかった黄」が見えると言う。鉱物と動物の間である植物に言及するならば、植物は「緑」である。この緑はしだいに「明るいバラ色」にまで移行するとされている（S. 63）。

先の「準備段階」で、植物の対立する二様相について述べた時、その時の集中思考から靈性の一つの基本線、一つの基本形象が生じることに言及した。この基本線や基本形象は、「開悟段階」にまで至ると、「明るく」なるとされている。「準備」から「開悟」に向かう修業者の心中で、「暗」から「明」への進化があると言うのである。

また、シュタイナーによれば「靈眼」の開く前に、靈界を守護している「大・小の番人」に出会うと言う。「靈眼」の開けた人が見るこの番人は物質界に出現したことの無い存在である。この存在は人間より高い存在であることもあり、低い存在であることもあるとされている。しかしいずれにせよ、修業の及ばない人がこれに出会えば正視はできない。そのために感覚界の堅固な柵が設けられ、超感覚的世界は見えない様になっている。しかし見えないが故の恩恵を人間は受けているとするのである。この柵を取って越えようとする人は、それにふさわしい資格の者となっていなければならない。

ともあれ修業者は、「開悟」することで修業を終了するのではない。さらに歩みを続けなければならない。「開悟」の喜びに有頂天となることなく、喜びのあまり性急な進歩を求めることなく、修業を続けなければならない。その際に、可能であれば自分の学んだことを他人にも伝えるべきである。「真実の修業のあり方は公開されなければならない」（S. 65）からである。——現実感覚を失うことなく、「道徳的な力、内的誠実さ、観察能力を修業を通して高めなければならない」（S. 64）。そしてあくまでも「慎重な態度」で歩みを続けるのである。

#### 四 超感覚的世界の認識と道徳性

—思考と感情の制禦を中心に—

シュタイナーは「開悟段階における感情と思考の制禦」のために特別の紙巾を取っている。



「開悟」の最初は、目覚めた諸能力が極めて微妙であるために、それと気付かれることは少ない。修業者は最初の経験があまりに平凡で、目立たないためにそれを無価値なものと思いがちである。しかし修業の持続を忘れないのであれば、「明白な進歩」を自覚できないとしても、「自分は正しい道を歩いているらしい」という感情は、「開悟」に至るはるか以前から生じてくる。

この感情こそ確かな導きとなるものであり、この感情は注意されなければならない。シュタイナーは一貫して、自分の感情を正確に観察し、また感情と共に生きている思考を誠実に営むよう勧告するのである。「私自身の感情や思考には最高の秘密が隠されている」(S. 68)。それと言うのも、超感覚的世界の認識(高次世界への認識)と言えども、修業者自身の感情と思考という、最も身近で最も確かな働きを手がかりとする以外にはそれに接近する道はないからである。

これまでも私達は修業者が取り組む集中の事例を見てきた。それらの事例は、修業者に彼自身の感情と思考を意識化させて、あるべき感情と思考に変様させようとする試みであった。修業者はシュタイナーの言葉に導かれて、自分自身の内に、高次世界を知覚する一種の「感覚器官」が存在することに気付くのである。この「感覚器官」はそれまでの感情と思考を手段(道具)として、高次世界に参入する新しい、あるべき感情と思考を修業者に開示するのである。

シュタイナーが「開悟段階における感情と思考の制禦」を重要視したのは、この制禦が修業の中核であるからに他ならない。小論ではこの制禦について、事例を紹介しながら考察する。そしてこの制禦に不可欠の条件として、修業者の道徳性の向上を指摘することができることを明らかにしたい。

### ①誕生と死

シュタイナーの事例である。——まず種子について、それらの形、色、その他の特徴を熟視する。次に以下の思考を行うのである。「この種子が地に播かれたら、一つの植物が生長する。」——その際、修業者は将来生じるはずの植物の姿を生き生きと思い浮かべる。これには想像力が必要である。——そして思考を続ける。「今、自分が想像の力によって作り出しているものを、将来、大地と光の力は現実にこの種子から招き出す。」「もしこの種子が見たところ本物そっくりに造られた模造品だったら、どんな大地や光の力も、そこから植物を招き出すことはできない。」——この思考内容をできるだけ明確にし、それを生き生きと体験することができたら、更に次の思考をして、その思考にふさわしい感情を体験する。——「種子の中には、眼に見えぬ仕方で、後にそこから生長してくる植物全体の力が具わっている。人工的な模造品にはそれはない。しかしそれにも拘わらず、私の眼には両方とも同じ様に見える。従って本物の種子の中には模造品の中には存在しない何か眼に見えずに内包されている。」——修業者はこの不可視なものに感情と思考の全てを集中するのである。——この集中を続けて、不可視なものが可視的なものになるまで待つ。すると「眼に見えぬものが見えるものになるのである。」——これができた時に次を思考する。「もし私に思考する能力が具わっていなかったなら、後に可視化される植物の色や形を、現在の私が既に心中に表象することにはならなかったであろう。」この思考内容に思考と感情を集中するのである。(S. 69~70)。

以上の思考と感情の集中過程で大切なのは、思考と感情が共に生きており、統一されてあること、「思考する内容を感情の内容にする」(S. 70)ことである。雑念を排し、静かに一つの思考内容だけを集中的に体験する。そしてこの体験を通して、当の思考と感情が心性の奥底にまで貫くようにするのである。

そうしようとする無数の試みの後に、やがて一つの力が生じてくると言う。この力はそれまでになかった新しい直観（靈視）を可能とするものである。——この直観によると上の種子は一種の焰として知覚され、「色」が見える。中心部は藤色に、周辺部は薄青色に似ている。（感覚的には不可視のものが、靈的に可視的な仕方で見えるのである。）

「種子」について集中した感情と思考は、次に「満開の花」を前にして続けられる。「この花を咲かせている植物にも枯れ死ぬ時が来る」と。再びそこでは、眼前にしているものの中に、見えない営みのあることが洞察されてくる。この洞察の感情と思考は次の様な体験となる。「今見ている植物から残るものは何一つない。しかし翌年生長する種子を作り出しているに違いない。この植物はまもなく存在しなくなるが、種子を作るという事実を通して、それは無に帰するのではない。無への消滅から護るものは肉眼では見えない。それは種子の中に、植物の今の姿を見ることができなかつたと同じである。だから植物の中には私がこの眼で見ることのできない何かが存在している。」——シュタイナーによればこの思考が活性化されて、それにふさわしい感情が伴う時、ここでも修業者の心の中には一つの力が育つ。新しい直観が生じてくる。この直観が「靈眼」に他ならない。「靈眼」を通して見ると、咲きほこる植物からは、種子の時よりも拡がりの大きい焰が見える。その「色」は中心が緑のかかった青、周辺が黄のかかった赤であると言う。

シュタイナーは植物の「種子と開花」を事例として、現在の存在のうちに、その存在を越える「過去と未来の存在」の現われを洞察できると言うのである。これは「誕生と死」の秘密を認識することの序となるものである。（私達は前章で、植物の生長と凋落の二つの様相についてなされた集中の結果を知っている。実はこれも「誕生と死」の秘密に至るものであったのである。）「誕生」以前、「死」以後をどの様に考えるかということは、超感覚的認識を得ようとする修業者には大切な問題である。しかしシュタイナーは、最始からこの問題を思考して迷路に陥るよりも、これまで私達が見てきたような事例で十分な修業を積むことを勧めるのである。

そうして到達する思考内容は次のものである。「靈的観点から言えば、誕生と死とは存在の一つの変化の相であるに過ぎない」<sup>(S. 73)</sup>。——この思考内容には生きた感情が一体化していなければならない。そしてこの感情は生き続けるのであらねばならない。「誰かがもっと楽に目標に達しようとして、上述した種子あるいは満開の植物をただ心に思い描き、想像の中に保持するだけで済まそうとするならば、それは大きな誤謬に陥る。そこには確実さがない。そうして生じる直観は多くの場合、想像力が産み出す主観的な幻影でしかない」<sup>(S. 74)</sup>。超感覚的世界の認識は主観的な幻影なのではない。客観的な現実を認識することなのである。それが客観的な現実であると確証できる根拠は、認識者における確実性、明証性である。この確実性、明証性は日常的な自我に由来するものではなく、修業者の心性の深みから生じる真理に由来する。この真理は、自身の生きる世界が主観による虚構の産物であることを承認しない。むしろ自分自身こそ客観的現実であるとして輝くのである。修業者はこの客観的現実を「より高い世界」、この客観的現実に入り込む資格を具えるに至った自分を「より高い人間」として意識する。その様な意識が成立するには、思考と感情は共に生きて一体化していなければならない。シュタイナーはその様な思考と感情でなければ、「誕生と死」の秘密は解明できないと言うのである。

## ②超感覚的認識と幻覚

これまでに植物について述べてきた思考と感情の制御、集中は、人間についても同じである。修業者は「開悟」と同時に「靈眼」を得て他人の「アウラ」を見ることができるようになる。

る。「アウラ」は幻影や幻想ではない。靈的に客観的な現実である。両者を混同してはいけない。真偽を区別できないといけない。この真偽の判定基準こそ、私達がさまざまな事例で繰り返し見たところの、修業者が修業によって体得するもの、彼自身の人間性の向上によって生じるものなのである。シュタイナーは真偽の判定基準を読者に「お答え」として与えない。しかし修業を真剣に、誠意をこめて、持続的に続けるのであれば、確実にその基準は明らかになることを保証する。自分自身では修業のための努力を何一つしないで、何処かの「霊能者」には見えるらしい「アウラ」についておしゃべりすることは不必要である。その様な人々は当然の事として超感覚的世界と幻覚世界とを区別することができない。超感覚的なものと非感覚的なものを混合する。そして物質界に関係する感覚世界の不確かさを予感する一方で、自分の感覚による物質界への固執を続けるのである。

超感覚的認識と幻覚を区別することは修業者にとっても重要である。修業者は自分が正しく歩んでいることを何によって知るのか。シュタイナーはいろいろな側面から修業者が注意すべきことを指摘している。小論の全体がその問いへの解答であると言うこともできる。繰り返しを恐れずに指摘しよう。思考と感情の制禦ができないといけないのである。言葉を変えて言うならば「健全な感覚」を持ち続けられないといけない。そして意識的であることが大切である。「修業者は、常に自分自身を全く意識的に支配し、日常の事柄に対すると同じ確かさで、自分の体験に対しても思考力を行使できねばならない。夢想に耽るようではいけない。冷たく醒めているのではないとしても、明るい知性を持ち続けなければならない。修業者の陥る最大の誤りは、修業を通して均衡を失い、日常の事柄に対するそれまでの健全で明確な判断力を忘れることである」(S. 71)。自分が均衡を失っていないかどうか、健全な自分を維持しているかどうか、修業者は自己吟味を続けなければならない。

そのことと自分の道徳性を点検することは一つである。次の言葉は、特に他人を観察し、他人に対して集中の修業をする時の戒めであるが、修業の「健全な感覚」の中に入れて理解することができよう。「自分自身の道徳的性格の純化に努力し、修業によって得た認識を自分の個人的な利益のために利用しようなどと考えることがあっては決してならない。その認識が周囲に対して権力となりうるとしても、決してそのような権力を乱用してはならない」(S. 75)。自分の我欲のための修業や興味本位の修業は全て、自分一人の枠内に閉鎖する傾向を生じてしまう。——シュタイナーの語る超感覚的認識への小道は、むしろ世界のために自分を真実の人間に形成していく道と一つなのである。この点を忘れ捨てる時から、単なるオカルト世界への質問や批判が際限なく生じる。

### ③修業者と道徳性

修業者には、そうでない人より以上の道徳性が要求されるのである。修業者は周囲の人について考える時、その人の尊厳や自由を妨げるような考え方をしてはならない。「一人の人間を単なる観察の対象に過ぎないかの様に考えることは、もはや一瞬たりとも我々には許されなくなる」(S. 77)。「一切の人間のなもの(それが記憶の中で考えられる時でも)に対する畏れと恥らしいの感情が我々を充たしていなければならない」(S. 78)。修業者は他人の自己肯定意識を尊重することができないといけない。しかも思考でそう思うのみではなく、それを生き生きとした感情で生きることができなければならない。——修業者が遵守しなければならない「真の神秘修業の黄金律」がある。それは小論の冒頭で紹介した次の言葉である。「神秘学の真理に向って汝の認識を

一步進めようとするならば、同時に善へ向けて、汝の性格を三步進めねばならない」(S. 75)。

超感覚的世界の認識を獲得しようとする修業者の試みについて、私達はこれまでに数多くの事例を見てきた。そうした事例で繰り返し確認したことは、修業者の内面の変革である。自分自身の内に或る種の道德性を確立することの不可欠さである。小論の最後にこれまでに言及した道德性に関する言葉を整理しておきたい。シュタイナーの述べる修業者に必要な「実践的観点」である。

- 忍耐すること。——性急さの否定である。また達成できたことは、ささいなことでも感謝できること。修業を思考と感情の営みの、静かで繊細な過程の中で進めること。
- 要求と欲望の沈黙。——自分本位の我欲が発動するのを抑えることができる。忍耐できないというのは我欲の発動である。
- 自分自身への誠実さ。——自分に幻想を抱いてはならない。欠点、弱点、無能な点を直視できなければならない。
- 好奇心の否定。——これも我欲と関係している。理念を理想として生きる人は、より敬虔な喜びに生きることができる。学ぶのは知識欲のためではない。
- 願望のあり方。——正しさ(真理である)故から願望が生じる。「何が正しいのかを認識する以前には、どの様な願望もちえない」(S. 101)。「前生が知りたい」といった願望は好奇心の現われであり、不純である。
- 怒りや不気嫌の克服。——これも我欲の形式を変えた現われである。事象の正しい観察ができるためには克服されなければならない。
- さらに不安、無気力、恐怖、迷信、独断、虚栄心、功名心、おしゃべり、そして身分や性や人種などの外的特徴から人を区別する態度、を克服する。——真、善、美、聖の言葉で語られてきたものが人生の中心となる。
- 徹底的に考え抜いたことを白にする。——「修業者は他人の意見に対して自分の別の意見を提出する時、それが当の相手にとってどんな意味があるかを見通すことができなければならない」(S. 104)。
- 温和さ。——修業者の性格と行為の基本がこれであること。これの逆は厳格である。
- 自分からの語りかけを中止(沈黙)して、周囲の心へ静かな注意を向けること。

以上を要約すれば次の様に言うこともできる。「平静と孤独の中に留まれ。修業以前に感覚が汝に与え続けてきたものに対して感受性を閉ざせ。これまでに習慣化した思考の営みを一切停止させよ。内的に全く静肅、寡黙になれ。そして忍耐強く持ち続けよ。そうすれば高次の世界が汝の魂の眼と霊の耳を生み出してくれるだろう」(S. 105)。

## 参考文献

- 1、Rudolf Steiner : Wie erlangt man Erkenntnisse der höheren Welten ? Dornach 1987
- 2、R・シュタイナー、高橋巖訳 「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」イザラ書房、1988、(小論の引用文章はこれに依拠している。訳語を一部変更した箇所もある)
- 3、Rudolf Steiner : Theosophie. Einführung in übersinnliche Welterkenntnis and Menschenbestimmung. Dornach. 1987
- 4、Rudolf Steiner : Die Geheimwissenschaft im Umriß, Dornach. 1989
- 5、高橋巖、神秘学講義、角川書店、昭和60年